

レナ川流域のハクチョウを探ねて

八 木 ト ミ

梅雨前線の停滞で九州は大雨、東京は40度の猛暑、だが新潟から飛行機での上空は快晴であった。1時間20分でウラジオストックに着く。東京より短時間でこれる隣国なのだ。金角湾に面した港町はビルが林立し、人があふれ活気はあるが、貧富の差がまざまざと見えた。

翌朝、50,000円換金、2,250,000ルーブルを懐に大金持ちの気分で機上の人となる。刻々と変化する雲や、機内食を楽しんで3時間50分北上し、サハ共和国の首都ヤクーツクに着陸した。凍土のため、床高のビルは5階建てが殆どである。地下資源の豊富なこの町は、格式ある建物もさることながら、人の表情も明るい。物資も豊富（中国、朝鮮の輸入品もある）だ。

今回の旅は、日本白鳥の会々長、松井繁氏から「奥さんも一緒に」とのお誘いで、観察隊の一員として参加させていただいた。思い出も沢山あるが、レナ川の1週間の滞在を主に書きたい。

7月16日、快晴、午後6時出航した。水泳や釣りを楽しむ人達を眺め、1時間して中州を散策、蚊や馬糞を気にしながらも一面に咲き誇る草花に心が和む。川の中に停泊している給油船から2時間かかるとの給油。午後9時、太陽は空に高く蒸し暑い。セーターや羽毛のヤッケを持参したのが悔やまれる。とうとうと流れるレナ川をブイや指示標識を頼りに、一晩中北上した。翌日17日午前11時15分、ヤクーツクから248キロ下流の町サンガールに着く。

ここの飛行場から20人乗りのプロペラ機で第一回の空中探索だ。緑の大地は想像以上に広い。蛇行するレナ川、枝のように川が注ぎ、葉のように無数に散在する沼・・・
12人の目が矢のごとく大地に注ぐ、同乗の研究員が、ヘラジカ、クマと手真似で教えてくれる。私は、揺れに気分が勝れず、ひたすら着陸を待った。2時間の飛行で白鳥は2羽か3羽か、予想よりはるかに少ない。

午後6時、再び舟はレナ川を下る。翌18日午前8時ランプスカヤの禁猟禁伐基地に寄るブロックの監視小屋をのぞく、ペーチカと窓辺にベット一つあるだけの小屋だ。厳寒の冬期は辛かるうに、こうしてまで動物や自然を保護していることに感服する。林の中を散策するが、蚊の大群に閉口し、早々に引き揚げる。ヘラジカの肉やチョーザメのスープで朝食には遅い12時15分の食事。1時30分、更に舟は下る。午後2時10分キャンプ地に到着。日本を出て6日目だ。ヤクーツクから3,200キロ下流だ。

北緯64、35、59、7。東経125、20、39、6。陸地に3張りのテントが張られ同行の研究員など総計何人になるのだろうか。夕食後3隻のボートで出かけたが、私は舟に残り婦人と子供の会話を聞いたり、ヘラジカの肉切りを眺めていた。日中素肌をやいた太陽は、10時30分沈みそうでまだ沈まない、丸い月がでた。川風が冷たい。ボートは午前1時頃に戻った。日本人は時間で行動するが、現地人は自然に合わせて行動することを知った。

7月19日、私の誕生日だ。照りつける太陽の中、ボートで出かける。鏡のような川面に中州の風景が、逆さまにくっきりと写って居る。川はどちらの方向に流れているのかまるで湖のようだ。同行のニコライ氏が中州の中にボートを漕ぎ入れた。湖と川はつながっているのだ。水草が繁茂し、小魚が泳ぎ、トンボが飛ぶ、手つかずの自然だ。砂地ではシギが甲高い声で警戒している。この日は12時～15時、19時～20時の二回探索した。野の草花を手折ってきてくれた監視長さんありがとう。23時、藤巻先生の司会で日本人だけの祝福をうける。現地調達のコイに似た魚の尾かしら付きだ。一匹丸ごとかぶりつく。次いで現地関係者がウォッカで乾杯、「レナ川の舟上で、美味しいお魚で祝福を受けて、大変うれしい」と藤巻先生に通訳をお願いした。興奮気味の私は、なかなか寝付けなかった。

7月20日、午前4時30分舟の揺れで目がさめる。波が岸边に当たる音、船べりをたたく強烈な音、綱が切れ、エンジンがかかる。船酔い気味、北風なら2メートルの波になるとか自然の厳しさを実感する。午後3時、朝、昼一緒の食事、全然食欲なし。夕食は、小西さんが持参のルーでカレーをつくる、私炊いたご飯はメッコ飯、誰も文句言わない、主婦失格。荒れた波は嘘のように静かだ。奥さんが摘んできたグミの整理を手伝う、赤く熟れたグミは手にべたつく、ジャムをつくるそうだ。北極の白夜で、皆夜中まで働く、漁に出ていた主人が帰る。「どうもありがとうございます」とはっきりした日本語で奥さんが言った。

7月21日、9時起床、熟睡していないのか頭痛、二日振りで陸に上がる。沼周辺を散策していた山内氏が「羽化したばかりのトンボが交尾をし、直ぐに食べられてしまった」と驚いていた。午後1時、前日のカレーを温めパンを食べる。ニコライ氏の指名で主人と三人で湖沼めぐり、2度目の上陸で焚火を一人で森に入って行った。狼煙？かもしれないが、蚊除けの燻らしい。柳の枝を燃やし、アジサシの飛ぶのを眺め待つこと30分、汗だくになって戻る。次の島へ、100mとの手真似なので気軽な気持ちで、写真機だけ持参する。確認した鳥を図鑑で示してくれる、理解できないがダーダーとうなづく。森の中を散策していたが方向がおかしい。雨が降りだした。雨具も傘も持っていない。突然ニコライ氏が大木に軽々と登った、方向の確認らしい。森を抜け、草丈が1米もある湿地に出た。草の根を踏みしめ慎重に歩く。こんな所に営巣するとゆうこんもりした所に感心していると「スワン」指差した沼に、緑の草から首を伸ばした白い妖精、粉れもないハクチョウだ「オーイ」主人が声をかける、「コオーコオー」と鳴いて水辺を泳ぎ回る、「ビックスワン」ニコライ氏、きっと巣があるに違いない、主人とニコライ氏が握手をする、私も濡れた手袋をはき取って握手をした、力強い大きな手だった。明日は捕獲か、安堵の念で雨も気にならない。ところがこれから2時間歩き回ったのだ。ボートについたときは全身ずぶ濡れ、ニコライ氏の熱い紅茶がおいしかった。午後9時舟が見えた。雨の中、全員甲板に出て迎えてくれた。キャビンでは温かいスープ山内氏の心づかいの浜頓別のトバと日本酒で乾杯した。「よく頑張った」とニコライ氏、私は笑顔でうなづいた。

7月22日、予定を1日繰り上げ帰ることになった。荷物を整理し、前日の濡れた衣類を焚火で燃やした。セーターと絹のスカーフを風呂敷に包んで奥さんにプレゼントした。息子のパーシャは笠原さんから帽子、主人から釣り竿をプレゼントされ、大変お気に入り喜んでいて、釣りと雑談でヘリを待つ。午後3時ヘリ到着。捕獲の重装備で、昨日発見した沼に向う。ヘリコプターで湿地に追込み、捕獲し、発信機を取り付ける計画だ。此処と思われる場所で発見できず、すると飛び去る1羽のオオハクチョウ、川面を飛ぶ・・・飛ぶ・・・究極の目的は達成されなかった。

キャンプ地で最後の食事、スパゲッティが美味しい。みんなで記念撮影。主人が一人一人の顔写真をドアップで写す。別れの時が来た。プロペラの風が草をなぎ倒し、一気に飛び去る。母なる大河レナ川、ハクチョウの故郷よ、永遠に。同行の皆様、お世話になりました。